

Ⅲ. 適性能力とカリキュラム（個人差とカリキュラム）

— 英語学力差にみられる問題点 —

高等学校進学率の増大に伴って、個人差に応じた教育の必要性が叫ばれ、またその試案もいくつか発表はされている。しかし現実問題としてその困難点が多種多様であることも確かである。

本校では、3学級の小規模学校であり、生徒選抜方式の関係上學力差は相当大きく、従って生徒の学力差に応じたカリキュラムを組むには非常な制約がある。自然学級における学力差をどのように把握し、どのような指導をすべきか、教科によっては配慮されているが、全体としては十分とは言えない。英語科の場合、現在高3のみ（学級増は40年度からであり、この学年はまだ2学級）を能力別編成3クラスとし、学期毎に適当と認められた者は上下への移動を許すことにし、またテキストも学力に応じたものを選択している。しかしこれも主として大学受験に備えた体制であるというのが実状である。能力別編成の全くされていない高

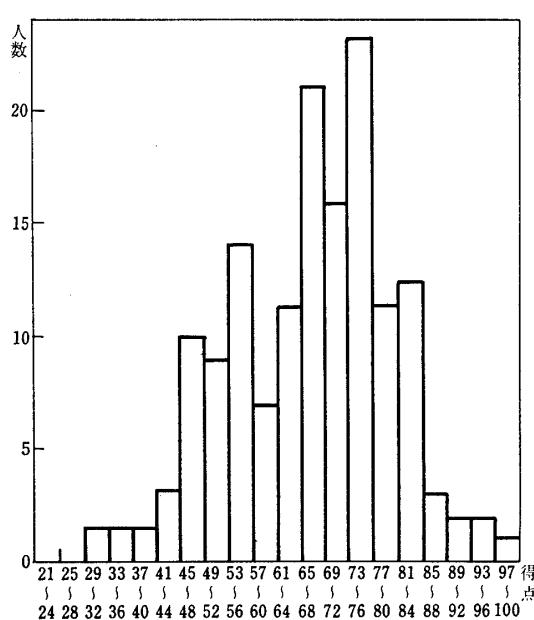
1、高2にあっては、学級内の能力差は更に大きく、充分にそれを考慮した授業の展開が必要となる。そのため能力差の実態——しかも絶えず変化しているそれを常に把握していかなければならない。

英語の学力というと総合的にみるとことが多いのであるが、英語学習の諸領域における学力差はどのようになっており、それを実際の指導の中でどのように生かしていくべきかを忘れてはなるまい。

今ここにある資料は、昭和41年度愛知県高等学校入学者の英語学力調査である。この調査の県全体の統計・考察については既に愛知県高等学校英語教育研究協議会によって詳細に発表されている。私は本校の分について、第1学年148名を得点により上中下の3グループに分け、問題別に成績を当てる。

本校148名の得点分布は図1のようになった。

(図 1)



この得点分布から、100~77点を上位、76~59点を中位、58点以下を下位グループとした。なお58点は県下全日制普通科の平均点でもある。人数は上中下それぞれ31、74、43名である。ここで各グループの平均点を問題別に調べたのが表1である。

各問題のねらいは、

1. 単語のアクセントの習熟度
2. 反意語の知識

3. 基本的な文法の運用能力
4. 機能語の習熟度
5. 英語特有の表現形式の習熟度
6. 英文を構成する能力
7. 長文の読解力
8. 英文を聞いて内容を理解する能力

となっている。

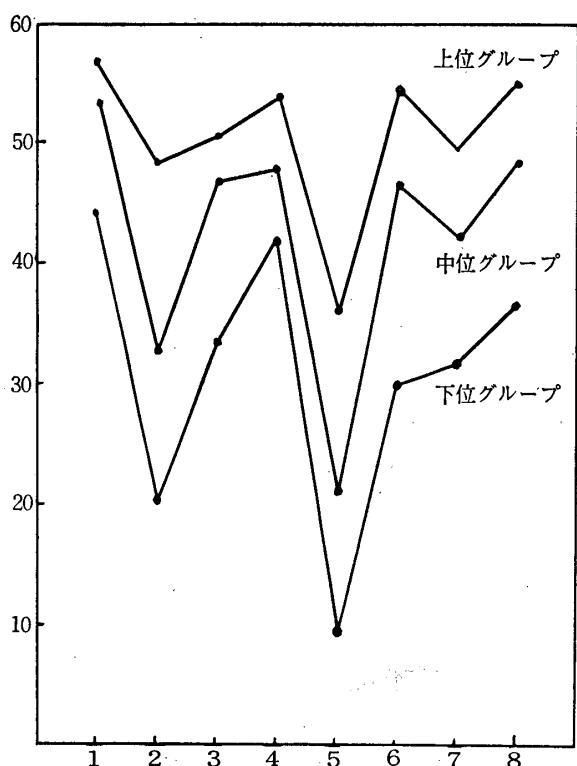
共同研究

(表 1)

問題 (配点) グループ (人数)									計 (100)
	1 (10)	2 (10)	3 (10)	4 (10)	5 (15)	6 (15)	7 (20)	8 (10)	
上 (31)	9.52	8.06	8.45	8.97	9.00	13.58	16.52	9.10	83.19
中 (74)	8.96	5.51	7.84	8.00	5.03	11.72	14.20	7.92	69.04
下 (43)	7.44	3.49	5.63	7.07	2.44	7.53	10.56	6.09	50.23

問題の内容により配点が異なるので、便宜上各問題を60点満点に換算して、上中下のグループ別に比較してみたのが図2である。

(図 2)



前記の表1と図2からいろいろなことが考えられる。問題の難易、解答形式の相違などによって、正答率はかなり変化していくことは当然予想されるが、問題5それに次いで問題2の平均点は各グループとも著しく低く、平均点の低い問題ほど上中下のグループ差が大きいことがまず注目される。問題2と5は、共

に直接英語を書かせる問題であり、また下位グループが特に低い問題6は、与えられた単語を正しい語順にする問題である。

問題はすべて基本的な段階のものであるが、Recognition と Production の間のギャップは大きい。このギャップは県下普通科の問題別正答率と、本校のそれを比較してみると、本校において一層はっきりしている。これは今後の指導上、特に Writing の指導上に重要な示唆を与えている。

次に最も成績の悪かった問題5の誤答調査を各グループ毎に行ってみた。詳細な結果はここでは省くが、中位下位グループにおいては誤答の種類が非常に多くその誤りも、英文としてはおよそ考えられないでたらめと言えるものが多い。

例えば、与えられた日本文の意味をあらわすように空所を満す問題の一つに次のようなものがある。

「あなたのクラスではだれがいちばんじょうずに英語を話しますか。」

Who () English () ()
() () ?

この問題の正答率は上中下のグループでそれぞれ61%, 23%, 9%であり、誤答の種類は実に約60にも及んでいる。問題6の成績を考え合せると、語順が中位以下の生徒の大きな困難点であることがわかる。能力別編成をとらない学級の中で、どのようにして英語学習の困難点をより小さくしていくか、特に Word Order 定着に関して効果的な指導方法を探りたいと思っている。

(高橋み)

III. 進路と適性能力

1. 適性型と適応型について

大学進学を目前にした高校の生徒を、将来の職業につながる学校や学部の選び方について、二つの種類に

大別してみることができると思う。

その一つは、自己の将来の職業について、はっきり